

5/22

樹海一日目。

早朝から樹海へ向かう。母親に「ちょっと樹海に行ってくる」と伝え、「あそ、気をつけて」と返ってきたのであまりのカジュアルさにビビる。

樹海の情報には主にオカルト系のウェブサイトから仕入れたので、気分はひたすらナーバスであった。こんなときに限って車用のFM トランスミッターが壊れたので軽快な音楽で気分を紛らわす事も出来ず淡々と現場へ向かう。まじでわたし何やってるんだろうと思ったし、お清めの塩を持ってくるのを忘れた事を本気で後悔していた。

高速道路の大渋滞に巻き込まれて到着が大幅に遅れたが、それでも現場に到着してしまった。まずは富岳風穴をせめる。駐車場には売店があり、洞窟を見学しに行く為の観光客で結構にぎわっていた。ナブチは観光客を見渡しては「あの、死ぬのかな？」とか「隣に停まってる所沢ナンバーの車、凄く嫌な気配がする。どうみても古いし、これは放棄車両なんだろうなあ」なんて事をずっと言っていた。あまり真剣に聞いているとナーバスな気分が助長されるので、わたしはひたすら『名物！コーンスープソフトクリーム』の味を想像する事に専念した。

そして樹海の遊歩道へ。結構人が多いなあ、と思ったけれどもその人達は全員、入場料を払って入る洞窟目当てのようで途中からは完全に無人になった。無料で通れる遊歩道は樹海の中を突っ切る形でできていて、その遊歩道をちょっと外れると、そこはもう誰の目にも届かない樹海なのだ。

来るまではひたすら嫌な気分だったのだけれど、いざ一步踏み入れて驚いた。根っこをむき出しにして立つ木々と、それを覆うコケと、生えまくる若い木の芽。なんとここは、火山の噴火にも溶岩の焼け野原にも屈しないダイナミックな生命力で溢れまくっているのだ。樹海は「死」の場所だと思っていたけれど、とんでもない。ここはまぎれもない「生」の場所で、再生の場所なのだ。この凄みは単純な「生命力」っていうよりは「死の向こう側の生」っていう方がしっくりくる。まさにこの世とあの世の境のような。実際目にするまでは「遊歩道から外れて樹海に入るなんて無理すぎる」と思っていたけれど、いつのまにか「早く中に入ろうよ」とナブチを急かしていた。しかし「まずは全貌を把握するのが先だ」と言われたので、とりあえずは遊歩道をぐんぐん歩く。歩いているうちに反対側の出口について、そこには「命を大切に」みたいな看板が建てられていた。

そして奥へ。奥の方で良い樹をみつけたので、そこに顔を伏せて「もういいかい」と声をだした。1秒、2秒、3秒、じっと目をつむりながら返事を待つ。返事が無いと言葉を繰り返す。「もういいかい」そして再び待つ。最初は目をつむっている事にやや抵抗があった。つながっちゃいけない場所につながっちゃいそうで、わたしはマジで一体なにをやっているんだと思った。でも目をつむって長く樹海の音だけに耳をすませていると、不思議とそんな抵抗が無くなってしまった。樹海に響く自分の声と、その先の無音に耳を澄ました。

さらに奥へ入る。奥の方には誰かが印をつけた樹がいくつもあった。ここに来たのは調査の人だろうか、探索の人だろうか、それとも。と、考えていたら、ナブチが「人かと思った！人かと思った！」と騒いでいた。どうやら木の根を、朽ち果てた人と見間違えたらしい。確かに、遠くから見るとそう見える。思えば思うほどそう見えるもので、その木の根に目が釘付けになってしまった。

今回ののは見間違いだったけれど、実際この場所にはそういう人が沢山いる。それってたぶん怖い事じゃない。わたしは純粹に悲しくなっちゃって「もういいかい」って叫びながら、誰か今この瞬間に奥へ行こうか帰ろうか迷っている人が居るならどうか返事をしてくれとひたすら願って、前より一層耳を澄ませた。

たぶんここに来ちゃった人は、世の中に「もういいよ」って思われたり、世の中を「もういいよ」って思った人達なんだろうけど、でもその「もういいよ」を今、叫び返してくれればわたしが探しに行けるのだ。「もういいかい」

樹海二日目。

前日に見た樹海のドキュメント番組に習い、遊歩道の『立入禁止』看板の先へ行く。

立入禁止看板の先は『少し整備された獣道』程度の道が続いていて、まだ真新しい白いビニール紐が奥へと続いていた。ほんの少し前に誰かがこの紐を持ってこの道を歩いたみたいだ。

真新しい紐に沿って歩く。一直線に進む紐には迷いが無くて、不思議と心強くも思えた。しばらく歩いて、最初に見つけた痕跡は炊き出しの案内表だった。ジップロックに入れられたその紙はかなり古いように見えた。さらに先へ進むと、獣道を外れた樹に紐が結ばれていた。紐が樹海の奥へ向かっている。今日は朝からビビっているナブチが「昨日、読んだんだけど、死ぬか迷っている人はこうやって紐を結んで奥に行くんだって」とブチブチ囁く。ほんの数秒どうしようか迷ったけれど、その紐を手にとって奥へ向かった。「僕が先に行くよ」と言うナブチだが、口先だけで先を歩こうとはしない。仕方ないので先に進む。わたしが今にぎっている紐は、誰かにぎっていた紐なんだろうか。ビニール紐の無機質な質感からなにかが流れ込んでくるような、こないような。

紐はどんどん奥へ向かう。その先に樹々と明らかに色の違う人工物が見えてハッとした。パックの日本酒だった。近よるとワンカップも転がっていた。どちらも風化していなくて新しい物に見えた。わたしが握っていた紐は、そのすぐ近くの樹に結びつけられていた。ここで、この人は迷ったんだ。と思って、紐が結びつけられた樹の周辺を目で追いかけて、その紐とは明らかに違う、丸く括られたロープを見つけてしまった。「あ」と声が出た気がする。人の姿は無かった。でもそのロープは確かにあって、その瞬間に「ずいぶん低い場所につけたんだな。やっぱり迷っていたんだろうな」なんて事を考えて、とりあえず手を合わせた。この人がここでどんな決断をしたかはわからないけど。

近くの樹に顔を伏せて「もういいかい」と何度も声を上げた。この人は「もういいよ」って思ってここに来ちゃったのかなあって思った。それを大きな声で誰かに言えたらここに来なくてすんだのかなあ。

何度も叫んでから再び紐を手を取った。ふと足下を見ると、ワンカップのすぐそばに『ジャスティス』と書かれたカンバッチが落ちているのを見つけた。こんな場所にまさかの言葉、ジャスティス。なんだか悔しくて「この世にジャスティスなんてないんだーないんだー」と叫びながら紐をたどって元の道へ引き返した。

再びの獣道。もう1キロくらい進んだ気がする。少し進むとまたすぐに奥へつながる紐を見つけてしまった。今日のわたしは残念ながら目がいい。再びその紐をにぎり、手前に引いてテンションを確認する。紐はスルスルとたぐり寄せる事ができてしまった。あ、この紐はつながっていないんだ。とりあえずその紐の先をたどって行くと、途中で朽ちたように切れていた。でもその先に再び紐が繋がっていたのを見つけたので、それをたどる。ここは紐が多いな、と思って周りを見渡すと辺り一面に紐が括り付けられていて、まるで結界のようになっていた。その結界の中心に、輪っかになったロープをみつけた。再び「あ」とも「あー」ともつかない声が出た。他の物は何も残されていなかったし、細い木に括り付けられたそれは、随分頼りなく見えた。

そしてまた「もういいかい」を繰り返した。もういいかい、を言うときはかならず目をつむる。だってそれがルールだから。不思議とここで目をつむっていると気持ちがいい。たぶんこの樹々は、溶けた溶岩の上に超がんばって根を張って生きている奴らで、そのダイナミックな生命力が気持ちいいのだ。なんだか外の世界とは全然違うんだよね。わたしはこの場所を選んでくる人達にちょっとだけシンパシーを抱く。別に死にたいって気持ちは微塵も無いんだけど、そういう選択を責める事も出来ないし、そんなつもりもない。

だから怖さは感じない。ここにいる人、居た人達は怖い人じゃない。本当に怖いのは外の世界だ。ジャスティスの無い外の世界。だからこそ、やっぱ、黙ってここへ来なきゃいけない人がいるのが悔しくて、ただ叫び返して欲しかった。じつと返事を待ったけど、返事は無かった。

6/18

三度目の樹海。

朝からどんよりと曇り空。今日はいつもと違う遊歩道から樹海の奥へ行く事になった。

今日は何故だか気が重い。ナブチは是が非でも奥へ行くと。今まではナブチの方が奥に行くのを嫌がっていて、わたしがガンガン奥へ入っていったのに何故だか今日は逆なのだ。

遊歩道を進んでひとつめのベンチの奥に獣道が見えた。入って行くと沢山のビニールテープが奥へ続いている。ちょっと歩くとお経とバスの時刻表が落ちていた。まじかあ。更に歩いた先、樹に巻かれた大量のビニールテープと人工物が目に入ったので「あ」と思った。火を焚いた後がある。ここでキャンプしたのだろうか。個人的にはこの場所がもう限界だった。ナブチはまだ奥へ行きたそうだった。ここで「もういいかい」を言うか凄く迷って、でも今言わないと機会を一生逃すぞと思って、ビニールが大量に巻かれた木によりかかって「もういいかい」と呼びかけた。今日は目を閉じる事が出来なかった。なにかとても気配のする場所だったから、とにかくその気配に向かって、呼びかけた。答えて欲しかったのだ。

ナブチはさらに奥へ行きたがる。わたしは三度断った。が、ナブチだけが一人で奥へ行ってしまったのでわたしも急いで後を追う。ヒモはさらに奥へ続く。ナブチがカメラを置いて映像を撮りはじめた。そこはもう気配がなんだかマックスで、わたしはその「何か」を目で探して、右から左へ、左から右へと何度も木々を目で追って、そして、長い長いヒモで木と繋がる彼を見つけてしまったのだ。

(以下、バーミアンに駆け込んで書いた文章)

ヒモをたどった先で彼を見つけた。

自分でも驚くような声が出て、そのあとはひたすらずっと「ごめんね」と大声で謝った。

そんな声を出してしまった事にと、いま恐怖していることにと、そっとしておいてあげなかったことにと、そもそもうちは「外」からやってきた人間で彼はそういう「外」に殺されちゃった人だろうからうちも同罪なんだとおもって、そういう諸々の思いが湧いて湧いて湧きまくってひたすら何度もごめんねと言った。それでも、この作品を辞めるわけにはいかないんだって意味の「ごめんね」もあったと思う。とにかく謝らずにはいられなかったのだ。この声は彼に届けなければならないと思って大声を出した。「君は悪くない、悪いのは外の世界だ」とも何度も言った。なぜだか「大丈夫だよ」ともずっと言っていた。なんだかわたしがいま恐怖を感じている事が彼に対して失礼な気がしたから。本当に怖いのは外の世界なんだと自分に言い聞かせていたような気もする。とにかくあらゆる感情が流れ込んできて声を上げずにはいられなかったのだ。このヒモはたしかに、なにかにつながっていた。

なんで樹海で「もういいかい」なのか、最初はなんだかよくわからなかった。直感だけがあって、それに従いながら答えを探そうかな、みたいな。でも今ならわかる。「もういいよ」という声を聞きたかったのだ。この糞みたいな社会に対して、世界に対して、きみが絶望した何かに対して声を出してほしかったし、そして一緒に帰りたいかった。でも、それはもう叶わなくなってしまった。あの場所は沢山のそういう人が居る場所だってわかってはいたけれど、やっぱり声無き姿を見つけてしまうと悔しくて悔しくて悔しいのだ。

(バーミアンで書いた文章おわり)

というわけで、わたしは非常に驚いて、ショックを受けて、足が震えて、「あ、まじで足って震えるんだな」って思ったりして、ひたすら彼に大声で話しかけて逃げるように走ってその場を後にしたのだった。勿論そのあとも気持ちが悪く着くわけなんかなくて駐車場で3本くらい一気に煙草を吸った。

少しだけ落ち着いて、今日ここでやめたらもう二度と来れなくなると思って再び樹海へ。しかし氷結洞窟の遊歩道入り口で「だめだ、もう入れないや」と引き返し反対側の入り口から入った。

反対側は空気が変わって明るい、とはいえやっぱり今までとは違って見える。でも行かなきゃ行けないんだと思って、中に入ってほとんどヤケクソで「もういいかい」と呼んだ。というか、叫んだ。樹海は残酷なくらい静かだった。もう誰でもいいから声が聞きたい、と思ったら遠くから子どもの声が聞こえて来た。遊歩道まで戻るとちょうど小学生団体とバッティング。彼らは樹海の案内板の前で「じゅかい！うえーい！！」と叫びながら集合写真を撮っていた。すげえ。ちなみにその看板の後ろにも、奥へ繋がる紐が結ばれている。まじで日本ってなんなんだろうと思った。ナニコレジャパン。

樹海から出る。なんだか無性に沢山の人間に会いたくてコンビニにいて、バーミアンに駆け込み「なんでこんなときにお腹が減るんだよ」って自分で自分に驚きながらあんかけチャーハンを食べて、混乱しながらなにかを吐き出すように一気に上の文章を書いた。

あの場所だけは超イヤな気配したから見つけて欲しくなかったのかなとか、でもやっぱり見つけて欲しかったのかなとかゴチャゴチャと考えた。とにかく彼の意志が、声が聞けないのが辛い。

そして彼の事を警察に連絡するかしないか、どうしようか悩む。ナブチもわたしもよくわからない。とりあえずそのまま近くの駅に向かい、駐車場で「やっぱりこのまま帰れない」と話して警察に連絡する事を決める。だってこれからまだまだ梅雨なのに、タスク君（彼の見た目が友人のタスクに似てたので、うちのあいだではタスク君と勝手に命名した）をこのままにしておくなんてできない。タスク君だってなんかに絶望してたはずだけど、腐っちゃうのはまじ勘弁って思ってるかもしれないし。

というわけで警察に連絡。電話に出たのは、いかにも警察官って感じの無愛想なおっちゃん「なんでそんなところ入ったの？見つけた時間から結構立ってるけどなにしてたの？え、飯？そのご遺体は帽子被ってた？靴はいてた？年齢とかわかる？」と、様々な事を聞かれた。帽子と靴の件が謎だった。

警察到着。大きな白いバンが2台やってきた。折りたたみ式の大きなリヤカーを組み立てて、再びタスク君の元へ。もう二度は来れないと思っていたけれど、結局彼の見える場所まで行ってしまった。不思議と、なのか、必然と、なのか、最初のときのようなショックはなくて「あー、タスク君だ」という感じと「もうすぐ降ろすからまってね」みたいな、なんだか落ち着いた気持ちで彼を見れたのだった。不思議だ。

現場検証というのがはじまって警察官が何枚も写真を撮る。こんな姿になってもすぐには降ろしてもらえないらしい。ナブチはタスク君を指差した写真を撮られていた。発見者の現場写真ということらしい。まさかのヴィト・アコンチ。まさかの指差し作業員。タスク君を指差してカメラに向かうナブチの姿はまじでシュールレアリスムだった。

帰り際、警察の人から「これは協力してくれたお礼に。公費だから貰ってね」と三千円を渡された。まさかの現金。こういう現場にはまさかの出来事が多いようだ。貰いたくない気分だったんだけど貰わないと収まりそうになかったので受け取る。タスク君の死が三千円に変わってしまった。この三千円、どーしろっていうんだ。

帰路。

気持ちの整理が着いたような着かないような。つくわけねーな。

わたしはこれを持って帰らなければいけないんだ。